情動知能と異性関係スキルの関係

豊田弘司
（奈良教育大学　学校教育講座（教育心理学））
矢追美佳
（香芝市立三和小学校）

Relationship between Emotional Intelligence and Heterosocial Skill

Hiroshi TOYOTA
（Department of School Education, Nara University of Education）
Mika YAOI
（Mitsuwa Elementary School, Kashiba）

要旨：大学生を対象にして、情動知能、恋愛感情及び異性関係スキルの関係を検討した。情動知能尺度は、Toyota　et al.(2007)による J-ESCQ 及び豊田・山本（2010）による J-WLEIS を用いた。恋愛感情の測定は、豊田・岸田（2006）による簡易版恋愛感情尺度を用い、異性関係スキルは、豊田（2005）の異性関係スキル尺度を用いて測定した。情動知能と異性関係スキルとの関係については、尺度得点間の相関係数からは明確ではなかった。しかし、情動知能尺度の項目ごとに異性関係スキルとの関係を検討したところ、男子よりも女子において異性関係スキルと関係の強い情動知能の項目の多いことが明らかになった。また、情動知能と恋愛感情との関係においては、他者の情動を理解することが男女ともに愛他的感情と関連することが示された。最後に、情動の制御と調節の育成が異性関係の成功につながる可能性が示唆された。

キーワード：情動知能　emotional intelligence
恋愛感情　romantic feeling
異性関係スキル　heterosocial skill

1．はじめに

思春期における中心的な関心は、友人との関係であるが、異性との関係をうまく構築することは、青年期から成人期にかけての重要な課題である。そして、異性からの好意を得たいという欲求は、青年期において多くの人が解決を求められる課題であるといえよう。それ故、青年は異性からどのように見られているのかという自意識が過剰になり、異性に好かれるための特性を身につけることに執着する傾向がある。

どのような特性が異性からの好意を規定するのかというテーマは、対人魅力（interpersonal attraction）研究の中心的研究課題である。態度が似ている人に対して好意をもつという類似性説（Byrne & Nelson, 1965）の提唱以降、数多くの研究がなされてきた。その後、対人関係スキルの研究から、特に、異性とのつきあいに関するスキルは，異性関係スキル（heterosocial skill）として研究されてきた（豊田，2005）。異性関係スキルに関する定義は多く、相羽・松井（2007）は、その定義をいくつか紹介し、その定義やとらえ方に混乱があることを指摘している。例えば、Galassi & Galassi（1979）は、異性関係スキルを「異性との社会的・性的関係を構築し、維持し、終結するために必要な行動」、Nangle & Hansen（1998）は、「異性との社会的相互作用全体でのやりとりに要求される社会的スキル」と定義している（相羽・松井，2007）。著者は、異性関係スキルを社会的スキルに含まれるものととらえているが、やや異なるものととらえる立場（Grover, Nangle & Zeff, 2005）もある。

このように、研究者による異性関係スキルのとらえ方の違いはあるが、その内容は共通する部分も多い。一般に、異性の気持ちがよくわかる人は異性から好意を持たれやすいということもいわれている。また、豊田（2005）は、自分の能力に肯定的な評定をする者ほど、異性の友人が多いことを指摘している。さらに、異性の友人が多い者は、表現の能力が高いことも指摘している。したがって、異性関係スキルとは、異性への感情をうまく表現でき、異性の感情をよく理解し、その理解に基づいて自分の行動を調節することになる。堀毛（1994）は、上記のようなスキルを記号化スキル（自分の心情を相手に伝える能力）、解読スキル（相手の心情を理解する能力）及び統制スキル（自分の心情を表現の仕方をうまく統制する能力）としてまとめている（金政・相馬・谷口, 2010）。

このような異性関係スキルには、近年、注目されている情動知能（Emotional Intelligence; EI）との共通性がある。EI とは、Salovey & Mayer（1990）の定義によれば、情動を扱う個人の能力である。そして、EI を有名にしたのが、Goleman（1995）による著書である。そこでは、社会的な成功が知能（IQ）よりも、情動を処理・制御する能力である EI によって予言される可能性が高いことを指摘した。そして、この著書はベストセラーとなり、その後、数多くの研究が行われるきっかけとなったのである（Mayer & Salovey, 1997; Schutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden, & Dornheim, 1998; Matthews, Zeidner, & Roberts, 2002; Wong & Law, 2002; Zeidner, Matthews, & Roberts, 2009; Joseph & Newman, 2010; 豊田・山本, 2011; 豊田・森田・金敷・清水，2005）。

研究者による幾分の違いはあるが、EI には、自分の情動の表現と命名（Expressing and Labeling emotion; EL），他者の情動の認識と理解（Perceiving and Understanding emotion; PU）及び自分の情動の制御と調節（Managing and Regulating emotion; MR）という３つの下位能力が含まれている（Toyota, Morita & Takšić, 2007）。

福田・成田（2010）は、PU に対応する能力と対人コミュニケーション効力感との間に正の相関を見いだしている。すなわち、他者の感情を理解できることは、対人関係に積極的になれる可能性を秘めている。また、豊田・島津（2006）は、対人関係における随伴経験量と EI との間に正の相関のあることを見いだしている。このように、対人関係における EI の重要性を示した研究からは、異性関係スキルに関しても、EI が貢献している可能性がうかがえる。具体的にいえば、異性に対して感情をうまく表現できることは、EL が背景になる。また、異性の感情を理解するというスキルは、PU と共通している。また、異性の感情に基づいて行動するというスキルは、情動の制御が不可欠であり、MR と関連している。したがって、EI の高さは異性関係スキルの水準を規定している可能性が高いといえよう。そこで、本研究の第１の目的は、EI と異性関係スキルとの関係を検討することである。

恋愛に関わる異性関係スキルとともに、恋愛感情に関する研究も数多く行われてきた。松井（1993）は、代表的な研究である Lee（1974）による６つの類型を紹介し、恋愛感情と対応させているが、それは以下のようなものである。1)遊戯的感情は、恋愛を楽しもうとする感情であり、この感情があると、特定の相手ではなく、多くの相手とつき合い、特定の相手との適度な距離をとろうとする。2)実利的感情は、相手とつきあうことによって、自分が損か得かに関わる感情であり、この感情があると、相手が自分にとってプラスになるか否かを考えることになる。3)友愛的感情は、相手に対する友情に近い感情であり、この感情があると、友達から恋人へ発展するのが望ましいと考えることになる。4)愛他的感情は、相手の幸せを喜ぶ感情であり、この感情があると、相手のためなら、自分を犠牲にしてもかまわないと考える傾向がある。5)熱愛的感情は、相手と自分がお互いに愛し合っているという感情であり、この感情があると、お互いが強く愛しあっているという実感を望む傾向が強い。6)狂気的感情は、相手を独占したいという願望に関わる感情であり、この感情によって相手に対する嫉妬などの激しい行動が生まれる傾向が強くなる。

上述したような恋愛感情を類型として、松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田（1990）は、測定尺度（LETS-2 ; Lee's Love Type Scale 2nd version）を作成した。ただし、この尺度は項目数が多かったので、豊田・岸田（2006）は、その簡易版を作成した。豊田・森田・岡村・稲森（2008）では、豊田・岸田（2006）で作成された簡易版恋愛感情尺度を用いて恋愛感情を測定し、EI の中の PU 及び他者感情と恋愛感情の関係を検討した。その結果、PU が低い場合には、空想的他者意識（他者の空想的なイメージに対する意識や関心）と狂気的感情との間に正の相関が見いだされている。また、男性は PU が低くなると、熱愛的感情が喚起されやすいことが明らかとされた。ただし、豊田ら（2008）では、恋愛感情として、狂気的感情、熱愛的感情及び実利的感情のみを扱い、EI では PU のみを検討している。また、PU の水準ごとに、他者意識と恋愛感情の関係は検討されたが、EI と恋愛感情との関係については検討されていない。したがって、本研究の第２の目的は、EI と恋愛感情との関係を検討することである。

２．方　法

２．１．調査対象

調査対象は大学生及び看護学校の学生 192 名（男子 73 名、女子 119 名）であった。これらの学生は、事前に研究の目的を説明され、協力を依頼された。調査は後述するように、２日に渡って実施されたが、その両日ともに調査用紙を提出し，記入漏れがない者だけを分析の対象とした。

２．２．調査内容

a）日本版 ESCQ　(J-ESCQ)

Toyota *et al.*（2007）による J-ESCQ を用いた。この尺度は、情動の表現と命名（ex.「私は，自分の気持ちや感情を表すことばがすぐに浮かんでくる。」）、情動の認識と理解（ex.「私は，誰かと一緒にいる時の様子をみると，その人の感情を正確に見きわめられる。」）及び情動の制御と調節（ex.「私は，不快な感情をおさえて，良い感情を強めようとしている。」）の３つの下位尺度からなり、各尺度８項目を含む全 24 項目の尺度である。各項目に対しては「いつもそうである（５）」「だいた

いそうである（4）」「時々そうである（3）」「めったにそうでない（2）」「決してそうでない（1）」の5段階評定尺度が用いられた。この尺度は教示文とそれぞれの尺度の各項目及び評定段階に該当する1から5までの数字が印刷された。

b)日本版WLEIS（J-WLEIS）

豊田・山本（2012）によるJ-WLEISも、情動知能を測る尺度として用いた。この尺度は、自己の情動評価（ES; ex.「私は、たいていの場合、何故自分がそんな気持ちになるのかが分かる。」）、他者の情動評価（EO; ex.「私は、友人の行動をみれば、その友人の気持ちがわかる。」）、情動の利用（UE; ex.「私は、いつも自分を励まして、全力を尽くせるようにしている。」）及び情動の調節（RE; ex.「私は、腹が立ったときでも、すぐに落ち着きを取り戻すことができる。」の4因子，各4項目からなる全16項目の尺度である。各項目に対しては「非常にあてはまる（7）」「かなりあてはまる（6）」「少しあてはまる（5）」「どちらともいえない（4）」「あまりあてはまらない（3）」「ほとんどあてはまらない（2）」「全くあてはまらない（1）」の7段階評定が用いられた。この尺度は教示文とそれぞれの尺度の各項目及び評定に該当する1から7までの数字が印刷された。

c)異性関係スキル尺度

豊田（2005）において、異性の友人が多い人と少ない人の間に有意差があった項目から、男女に共通する項目を抜粋した。これらの項目は、会話のスキルに関する6項目（ex.「異性のよい点を素直に言葉にできる。」）、対人不安に関する4項目（ex.「人から嫌われるのではないかという不安がある。」）及び対人関係における自信に関する4項目（ex.「自分の能力に自信がある。」）の全14項目である。評定は「非常にあてはまる（4）」「かなりあてはまる（3）」「ややあてはまる（2）」「あまりあてはまらない（1）」の4段階評定が用いられた。（なお、豊田（2005）では、評定の得点化は、0～3の範囲で行われている。）この尺度は、教示文とそれぞれの尺度の各項目、評定段階に該当する数字を記入する（　）が印刷された。

d)簡易版恋愛感情尺度

恋愛感情の測定に関しては豊田・岸田（2006）による尺度を用いた。この尺度は狂気的感情（ex.「彼（女）には、いつも私のことだけを考えていてほしいと思う。」）、熱愛的感情（ex.「彼（女）と私はお互いにすぐに感情的にのめり込んでしまった（しまうと思う）。」）、愛他的感情（「彼（女）のためなら、私はどんなことでも我慢できると思う。」）、実利的感情（「彼（女）を選ぶとき，その人が私にプラスになるかを考えてみた（考えると思う）。」）、友愛的感情（彼（女）との恋愛関係は，よい友情から発展した（させたいと思う。）」及び遊戯的感情（彼（女）以外にも、多くの異性とつきあいたいと思う。」の6因子，各5項目からなる全30項目の尺度である。各項目に対しては「よくあてはまる（5）」「少しあてはまる（4）」「どちらともいえない（3）」「あまりあてはまらない（2）」「まったくあてはまらない（1）」の5段階評定であった。そして、教示文とそれぞれの尺度の各項目及び評定段階に該当する数字を記入する（　）が印刷された。

上述した4つの尺度はまとめられ, A4判の両面印刷2枚の調査用紙にされた。

２．３．調査手続き

調査は上述した4つの尺度を用いて、2回に分けて集団的に実施された。被調査者は上述の尺度が印刷された用紙を配布され、調査項目の評定の仕方についての教示を与えられた。その後、調査者によって読み上げられる項目に対して、評定段階に対応する数字を（　）に記入、または数字を○で囲んでいった。

３．結果と考察

３．１．EIと異性関係スキルの関係

a)EIの下位尺度得点と異性関係スキル合計得点の関係

日本版ESCQ及びWLEISの下位尺度の各得点と異性関係スキル尺度との相関係数を算出した。Table1には、日本版ESCQと異性関係スキル全体得点との相関、及び有意な相関が得られた項目、Table2には、日本版WLEISと異性関係スキル全体得点との相関及び有意な相関が得られた項目が示されている。

Table1における日本版ESCQと異性関係スキル（全体）には、有意な相関はみられなかった。しかし、女子に比べて、男子は3つの下位尺度と異性関係スキル（全体）との間に有意ではないが、微弱な相関（r=.20以上）が見られている。この結果からは、総じて男子の方が女子よりもEIと異性関係スキルとの関係が強い傾向がうかがえる。ただし、Barlow, Abel, Blanchard, Brisyow & Young（1977）は、異性関係において、男子が女子よりも積極的に行動し、会話においてイニシアティブをとることの重要性を指摘している。そして、男子における異性関係スキルのチェックリストを作成している。豊田（2005）は、男女ともに異性からの好意度が高いと評価される人と低いと評価される人の違いに注目し、男女共通の異性関係スキルの解明を目的としたが、女子に比べて、男子が指摘される行動上の違いが多い。これらの研究を考慮すると、女子よりも男子において異性関係スキルが強調されてきた背景がある。それ故、女子よりも男子における行動の特徴をより多く異性関係スキルとして位置づけてきた可能性が指摘できる。

日本版WLEISでは、女子において他者の情動評価（EO）と異性関係スキル（全体）に正の相関（r=.35）が見られた。また、情動の利用（UE）と異性相関スキル（全体）において、男子（r=.31）、女子（r=.32）と

Table 1　日本版 ESCQ と異性関係スキルの相関（r）

	EL		PU		MR	
	男	女	男	女	男	女
異性関係スキル合計得点	.24	.16	.23	.10	.23	.03
「知らないうちに自分の手や顔を触るくせがある」	.05	-.34*	.01	-.25*	.01	-.12

Table 2　日本版 WLEIS と異性関係スキルの相関（r）

	ES		EO		UE		RE	
	男	女	男	女	男	女	男	女
異性関係スキル合計得点	.02	.12	.21	.35*	.31*	.32*	.09	.13
「異性との会話では自分がしゃべる方が多い。」	.07	.01	.07	-.04	.01	-.05	.25*	-.07

Table　3　異性関係スキル合計得点と有意な相関が得られた日本版 ESCQ の項目

項　目	r
男子	
「私は気分のよい時にはどんな問題でも解決できるように思う。」（MR）	.38**
「私は、自分の感情をうまく表現できる。」（EL）	.34**
「私は誰かが本当の気持ちを隠そうとしていてもそれに気づく。」（PU）	.24*
女子	
「私は、誰かと一緒にいる時の様子をみると、その人の感情を正確に　見きわめられる。」（PU）	24**
「私は自分の気分について多くのことを知っているといえる。」（EL）	22*
「私は、自分の感情をうまく表現できる。」（EL）	.21*
「私は自分がどのように感じているかを表現することができる。」（EL）	.20*

Table　4　異性関係スキル合計得点と有意な相関が得られた日本版 WLEIS の項目

項　目	r
男子	
「私は、他人の気持ちや感情に対して敏感である。」（EO）	.29*
「私は、自分でやる気を高めようとする人間である。」（UE）	.28*
「私は、いつも自分を励まして、全力を尽せるようにしている。」（UE）	.23*
女子	
「私は，友人の行動をみれば，その友人の気持ちがわかる。」（EO）	.29**
「私は，自分でやる気を高めようとする人間である。」（UE）	.28**
「私は，周りの人たちの気持ちを良く理解している。」（EO）	.28**
「私は，いつも自分が有能な人間であると自分に言い聞かせている。」（UE）	.26**
「私は，自分の感情の高まりをおさえられるので，難しい課題であってもそれらをうまく処理できている。」（RE）	.26**
「私は，他人を観察して，その人の気持ちをわかろうとしている。」（EO）	.24**
「私は，他人の気持ちや感情に対して敏感である。」（EO）	.22*
「私は，いつも自分の目標を立て，それを達成するために全力を尽くす。」（UE）	.22*
「私は，いつも自分を励まして，全力を尽せるようにしている。」（UE）	.20*

もに正の相関がみられた。Mayer & Salovey（1997）によれば、情動の利用は、思考を促進するための感情に接近したり、その感情を生成する能力に対応している。したがって、自分の情動をコントロールし、パフォーマンスをあげることが異性関係スキルを上手く活用できることに繋がるといえよう。豊田（2005）は，異性関係スキルの高い者は異性の友人数が多く、異性からの主観的好感度も高いことを示しているが、その背景に情動の利用能力が影響している可能性がある。

Table　5　日本版 ESCQ 及び WLEIS の下位尺度と恋愛感情との相関（r）

	ESCQ						WLEIS							
	EL		PU		MR		ES		EO		UE		RE	
恋愛感情	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
狂気的感情	-.05	-.13	-.10	-.07	-.13	-.06	-.12	.04	.02	.08	-.10	.00	-.13	-.07
熱愛的感情	.23	-.03	.08	.05	.17	-.06	.03	-.09	-.02	.19	.07	.09	-.09	.03
愛他的感情	.19	-.17	**.26***	.17	.19	-.13	.06	-.18	.22	**.25***	.20	-.03	.04	.09
実利的感情	.23	.14	**.37****	.01	.22	.08	.20	.06	**.27***	.05	.14	**.25***	.13	.04
友愛的感情	.02	-.07	.02	.03	.20	.10	-.01	-.02	.03	.06	.23	-.06	-.04	-.03
遊戯的感情	.16	.08	.13	.14	.05	.03	.17	.09	.05	.00	-.02	.13	.08	.14

b)異性関係スキルの項目と EI の関係

日本版 ESCQ と異性関係スキルの項目ごとに相関をみたところ、女子において EL（r=-.34）及び PU（r=-.25）と「知らないうちに自分の手や顔を触るくせがある。」においてのみ、有意な負の相関が見られた。手や顔を触ることは、不安や緊張状態を緩和するために取る行動である。自分の情動を上手く表現できる女子や相手の情動を理解できる女子は、異性と対面した際に自分の気持ちが伝わらないことや相手の気持ちが分からないといった場面を避けられるため、手や顔を触る動作が少ないのであろう。EI は、自己評定法及びパフォーマンステストによって査定されてきたが、行動特徴による査定の可能性も指摘されている（豊田, 2015）。これまで言及されてこなかった上記の項目が示す行動が EI の査定に有効である可能性が示唆されたことは興味深い。

日本版 WLEIS と異性関係スキルの項目では、男子において情動の調節（RE）と「異性との会話では自分がしゃべる方が多い。」に正の相関（r=.25）が見られた。情動の調節によって、Barlow *et al.*（1977）が指摘するように、異性との会話ではイニシアティブをとる可能性が高いことを示している。

c)EI 尺度における項目と異性関係スキルの関係

Table 3 には、男女ごとに、異性関係スキルの合計得点と有意な相関が認められた日本版 ESCQ の項目とその相関係数が示されている。男子では、MR、EL 及び PU の各下位尺度からそれぞれ 1 項目ずつ異性関係スキルとの有意な正の相関があった。男子は、異性との関係において主導的に行動する必要性が指摘させているので（堀毛, 1987）、自分の意志を明確に提示するという能力（EL）が必要であるが、それに加えて、相手の情動を理解し（PU）、その相手の情動に合わせた行動や問題解決の能力（MR）が必要であることがわかる。

女子では、Table 3 の右欄に示したように、PU の 1 項目を除いて、後は EL の項目である。女子は一般的に受け身的であると考えられてきたが、堀毛（1987）においては異性から好意を持たれる可能性の高い女子は、積極性が高いことが明らかになっている。また、豊田（2005）では、会話の積極性が異性関係スキルとして女子では重要であることが指摘されている。これらを考慮すると、自分の情動を積極的に表現する女子が異性関係において成功する可能性の高いことが示唆される。

Table 4 には、男女ごとに、異性関係スキルの合計得点と有意な相関が認められた日本版 WLEIS の項目とその相関係数が示されている。男子では、情動の利用（UE）の項目が 2 項目、女子では UE に含まれる全 4 項目が異性関係スキルと有意な正の相関が認められている。この結果は、男女ともに情動をうまく利用して、動機づけを高める能力が異性関係に良い影響を及ぼす可能性を示唆している。異性関係における相手との交流においては、相手と関わろうとする動機づけが不可欠である。

豊田による一連の研究（豊田, 2006, 2014; 豊田・島津, 2006）では、対人関係における随伴経験（相手への行動が、相手からの良い反応として返ってくる経験）が自己への肯定的イメージを高め、自尊感情を向上させることが示されている。このような肯定的なイメージが対人関係における積極性を促進する可能性が示唆される。本研究では、随伴経験量を測定しなかったが、今後の研究課題として、随伴経験量と UE の関係について検討することも必要であろう。

女子においては、他者の情動評価（EO）の全 4 項目が異性関係スキルと有意な正の相関が認められている。他者の情動を理解することは、異性関係スキルと関連性の強いものであることがわかる。他者の情動評価の高い女子は、相手の様子の変化から気持ちの動きを読み取り、その時々に合った異性関係スキルを活用することができると考えられる。男子よりも、女子において有意な正の相関が多いことは、女子においては EI が高いことが異性関係スキルとの関連性が強く、EI が高いことが異性関係での成功に貢献することがうかがえる。Toyota *et al.*（2007）は、EI と Big-five 等の他の尺度との相関に性差のあることを指摘したが、上記の結果も、EI と異性関係スキルとの相関に性差があることを見いだした結果といえよう。

３．２．EI と恋愛感情の関係

本研究の第 2 の目的は、EI と恋愛感情との関係を検討

することであった。日本版 ESCQ 及び日本版 WLEIS の下位尺度の各得点と恋愛感情尺度との相関係数を算出した。Table5 の左欄には、日本版 ESCQ と恋愛感情尺度の相関、右欄には、日本版 WLEIS と恋愛感情尺度との相関が示されている。

日本版 ESCQ では、男子において PU と愛他的感情間に有意な正の相関（r=.26）が見られた。豊田ら（2006）によると、愛他的感情によって、相手のためなら自分を犠牲にしてもかまわないと考える傾向が増す。相手の利益をまず考えるため、相手の要求を把握する能力が必要とされる。他者の情動理解ができる男子は、相手の情動の変化を読み取ることができ、相手のためにとるべき行動を考慮するので、愛他的感情が喚起されやすいのであろう。

また、PU と実利的感情に有意な正の相関（r=.37）が見られた。これは、他者の心情を理解する能力と、異性とつきあうことが自分にとってプラスになるか否かを考える心情が関連していることを示している。この結果は、先に愛他的感情との正の相関が有意であったことと矛盾するように思われる。しかし、相手の心情を理解する能力によって、愛他的に行動するのか、実利的に行動するのかという判断が左右されるといえよう。男子では、このような相関が認められたが、女子においては全く有意な正の相関が見られなかった。これは、先に述べた EI と他の尺度との相関における性差の一つといえよう。

日本版 WLEIS では、男子において EO と実利的感情に正の相関（r=.27）が見られた。EO と先に述べた PU とは類似した能力なので、男子では他者の心情を理解する能力と実利的感情の関連性が追証されたといえよう。

一方、女子では EO と愛他的感情（r=.25）に正の相関があり、他者の心情理解が愛他的感情へつながる可能性が示された。さらに、情動の利用（UE）と実利的感情（r=.25）に正の相関が見られた。豊田・岸田（2006）では女子が男子よりも実利的感情が高いことが示されているので、情動の利用能力の高い女子は、恋愛においても動機づけを高め、自分の理想や利益を求める傾向が高まるのかもしれない。その証拠に、豊田（1999, 2000, 2001）は、女子が男子よりも異性に求める特性が多いことを明らかにしている。したがって、女子が男子よりも恋愛に関する情報を詳細に処理している可能性が示唆される。

４．まとめと今後の課題

本研究で明らかになった最も大切なことは、EI が異性関係スキルに影響していることである。異性関係スキルの高さが必ずしも異性関係での成功を予言するわけではない。しかし、異性関係スキルと EI の関連性が示されたことは、EI を高めれば、異性関係における成功が期待できるというものである。EI を高める要因は、調査研究で明らかになったのは、随伴経験、共感経験及び内的他者意識である（豊田, 2015）。

随伴経験は、他者と関わる意欲を喚起すると考えられ、その結果、自分の情動をうまく表現できる能力（EL）を伸ばす可能性が期待できる。また、共感経験や内的他者意識は、他者の心情を理解する能力（PU）の育成に貢献することが期待できる。しかし、他者の心情を理解して、その心情に合わせて自分の情動や行動を調整するという能力（MR）の育成に関しては、決定的な要因が見いだされていない。この MR という能力は、異性関係スキルの中の統制スキル（堀毛, 1994）に大きく貢献すると考えられ、この能力を促す要因の解明が今後の課題である。

EI と恋愛感情の関係については、ESCQ 及び WLEIS ともに一貫して他者の情動の理解に関する能力（PU、EO）と実利的感情の関係が見いだされた。これは，他者の情動の理解が実利的感情を伴っているという解釈も可能である。対人関係において実利的感情は否定的なニュアンスが大きいが，実利的な感情をもつことによって他者の情動理解につながる可能性がうかがえる。

したがって、児童・生徒に随伴経験を促し、それによって EI を高め、それに付随して異性関係（対人）スキルを向上させる。ただし、実際の異性（人）との関わりにおいては他者の心情理解が必要なので、それを促すためには実利（対人関係における自分の利益）的感情を刺激することが有効な場合もあるのかもしれない。

引用文献

Barlow, D. H., Abel, G. G., Blanchard, E. B., Brisyow, A. R., & Young, L. D. 1977 A heterosocial behavior checklist for males. *Behavior Therapy*, 12, 41-55.

Davies, M., Stankov, L., & Roberts, R. D. 1998 Emotional intelligence: In search of an elusive construct. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 989-1015.

Galassi, J. P., & Galassi, M. D. 1979 Modification of heterosocial skills deficits. In A. S. Bellack, & M. Hersen (Eds.), *Research and proctice in social skill training*. New York: Plenum Press. pp. 131-187. （相羽・松井，2007 による）

Goleman, D. 1995　*Emotional intelligence*. New York: Bantam Books.（土屋京子訳　1996「EQ:　こころの知能指数」　講談社）

Grover, R. L., Nangle, D. W., & Zeff, K. R. 2005 The measure of adolescent heterosocial competence: Development and initial validation. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 34, 282-291.

福田哲也・成田健一　2010　対人コミュニケーション効力感の生涯発達：シャイネス・情動知能を指標とした効力感の形成要因　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集，19，112.

堀毛一也　1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, **34**, 116-128.

Joseph, D. L. & Newman, D. A. 2010 Emotional intelligence: An integrative meta-analysis and cascading model. *Journal of Applied Psychology*, **95**, 54-78.

金政祐司・相馬敏彦・谷口淳一　2010　「史上最強図解 よくわかる恋愛心理学」　ナツメ社　pp. 30−31.

Lee, J. A.　1977　A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 172-182.（松井, 1993 による）

松井　豊　1993 恋ごころの科学 サイエンス社

松井　豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美　1990　青年の恋愛に関する測定尺度の構成　東京都立立川短期大学紀要, **23**, 13-23.

Matthews, G., Zeidner, M., & Roberts, R. D. 2002 *Emotional intelligence: Science and myth*. Cambrige, MA: MIT Press.

Mayer, J. D., & Salovey, P. 1997　What is emotional intelligence? In P. Salovery & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. Pp.3-34. New York: Basic Book.

Nangle, D. W., & Hansen, D. J. 1998　Adolescent heterosocial competence revisited: implications of an expanded conceptualization fo the prevention of high-risk sexual interactions. *Education and Treatment of Children*, **21**, 431-446.

Salovey, P., & Mayer, J. D. 1990　Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, **9**, 185-211.

Schutte, N. S., Malouff, J. M., Hall, L. E., Haggerty, D.J.,Cooper, J. T., Golden, C. J., & Dornheim, L. 1998 Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, **25**, 167-177.

豊田弘司　1999　大学生における嫌われる特徴の分析 奈良教育大学教育研究所紀要, **35**, 71-75.

豊田弘司　2000　大学生における好かれる男性及び女性の特徴　奈良教育大学教育研究所紀要,**36**,73-76.

豊田弘司　2001　人間関係の基礎－好きと嫌いの心理学－　天理よろづ相談所世話部

豊田弘司　2005　大学生における異性関係スキル 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要　**14**, 5-10.

豊田弘司・岸田麻里　2006　教育用簡易版恋愛感情尺度の作成　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要　**15**, 1-5.

Toyota, H.　2008　Interpersonal communication, emotional intelligence, locus of control and loneliness in Japanese undergraduates. In J.Van Rij-Heyligers (Ed.), *Intercultural Communications across University Settings-Myths and Realities. Refereed Proceedings of the 6th Communication Skills in University Education Conference.* (*pp.* 42-54). New Zealand:Pearson Education

Toyota, H. 2009　The person who eases your mind "Ibasyo" and emotional intelligence in interpersonal adaptation. *Horizons of Psychology*, **18**, 23-34.

Toyota, H. 2011 Differences in relationship between emotional intelligence and self-acceptance as function of gender and *ibasho* (a person who eases the mind) of Japanese undergraduates. *Psychological Topics*, **20**, 449-459.

豊田弘司　2014　随伴経験、統制の位置及び自尊感情の関係　奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要,　**23**, 7-12.

豊田弘司　2015　第 2 章　感情知性（EI）を測るには『本当のかしこさとは何かー感情知性を育む心理学ー』日本心理学会監修　箱田裕司・遠藤利彦編著 pp.20-35.

豊田弘司・岸田麻里　2006　教育用簡易版恋愛感情尺度の作成　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要,　**15**, 1-5.

豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治　2005　日本版 ESCQ（Emotional Skills & Competence Questionnaire）の開発　奈良教育大学紀要,　**54**, 43-47.

豊田弘司・森田泰介・岡村季光・稲森涼子　2008　大学生における他者意識と情動知能の関係　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **17**, 29-34.

豊田弘司・島津美野　2006　主観的随伴経験と情動知能が感情に及ぼ影響　奈良教育大学紀要, 55,　27-34.

Toyota, H., Morita, T., & Takšić, V. 2007 Development of a Japanese version of the Emotional Skills and Competence Questionnaire *Perceptual and Motor Skills*, **105**, 469-476.

豊田弘司・山本晃輔　2011　日本版 WLEIS (Wong and Law　Emotional Intelligence Scale) の作成　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, **20**, 7-12.

Wong, C. S., & Law, K. S. 2002 The effects of leader and follower emotinal intelligence on performance and attitude: An exploratory study. *The leadership Quarterly*, **13**, 243-274.